

報道関係者各位

PRESS RELEASE 2017年1月10日

No.2016-071-1/5

戦後から今日までの日本の住宅建築の系譜

「日本住宅建築展 The Japanese House: Architecture and Life after 1945」

日本の建築家 56 組の 75 件にも及ぶ住宅建築の展覧会、ローマ、ロンドン、そして東京でも開催！



篠原一男 白の家 (1966/2008) 写真: 村井修



中山英之 0 邸 (2009) ◦ 北村光隆



藤本壮介 House NA (2011) ◦ Iwan Baan



丹下健三 住居 (1953) 写真提供: 内田道子



藤森照信 ニラハウス (1997) ◦ 増田彰久

国際交流基金(ジャパンファウンデーション)は、現在イタリア・ローマにて「日本住宅建築展 The Japanese House: Architecture and Life after 1945」を開催しております。(会期:2016年11月9日~2017年2月26日)。

日本では、毎年無数の住宅が作られており、国際的に活躍する日本人建築家の多くも住宅設計に携わっています。しかし、これまで日本の「住宅」に特化した大規模な展覧会が海外で開催されることはほとんどありませんでした。本展は、戦後から今日までの日本の建築家56組による75件の住宅建築を、400点を超える資料を通して体験していただくという大胆な試みです。戦後70年間で大きく変遷を遂げた日本社会において、「住まう」という最も根源的な人間の活動に対する建築家たちの取り組みを、一人でも多くの鑑賞者の皆様に存分に読み取っていただけましたら幸いです。

本展覧会は、日本とイタリアが1866年に日伊修好通商条約を締結してからちょうど150周年を迎える周年記念事業の一環として、イタリア初の国立現代美術館として2000年に設立された国立21世紀美術館(MAXXI)との共催により実施するものです。つきましては、新たな視点でお送りするこの展覧会を、この機会にぜひ貴媒体でご紹介いただきたく、何卒よろしくお願ひ申し上げます。ローマでの会期の後には、ロンドン(バービカン・センター)及び東京(東京国立近代美術館)においても巡回展示される予定です。尚、展示内容は会場によって一部異なりますのでご了承下さい。

■ **日本住宅建築展 The Japanese House: Architecture and Life after 1945**

【会期】 2016年11月9日(水)～2017年2月26日(日)

【会場】 イタリア国立 21世紀美術館(MAXXI)

【巡回会場・会期】 [イギリス/ロンドン]バービカン・センター 2017年3月23日(木)～6月25日(日)

[日本/東京]東京国立近代美術館 2017年7月19日(水)～10月29日(日) (予定)

【キュレーター】 保坂健二郎 (東京国立近代美術館主任研究員)

Pippo Ciorra (イタリア国立21世紀美術館 シニア・キュレーター)

Florence Ostende (バービカン・センター キュレーター)

【学術協力】 塚本由晴 (アトリエ・ワン/東京工業大学教授)

藤岡洋保 (東京工業大学名誉教授)

【展示デザイン】 (ローマ会場) アトリエ・ワン

【主催】 独立行政法人 国際交流基金、各開催館

【制作】 独立行政法人 国際交流基金、各開催館

【協力】 アリタリア-イタリア航空、日本航空

【開催趣旨】

本展は、「系譜学」(ミシェル・フーコー)の観点から、第二次世界大戦後から今日までの日本の住宅建築を分析しようとするものである。具体的には、1901年生まれの坂倉準三から1980年代生まれの若手建築家までを紹介することになるだろう。全体としてはクロノロジカルな展示になるが、その中に、いくつかの系譜が絡み合っている様子を可視化するようにしたい。

日本の住宅建築は、世界的に見て独自の「発展」を遂げている。戦後、さまざまな政策により、日本における人々の住まいは、借家ではなくて持ち家を中心となった。これにより、日本の建築家の多くは、「住宅」の設計を通じて「建築」を考えるチャンスを得ることとなった。安藤忠雄(1941-)、伊東豊雄(1941-)、妹島和世(SANAA 1956-)、西沢立衛(SANAA 1966-)、坂茂(1957-)といった、プリツカー賞受賞者が、多くの場合は受賞後も決して大きくはない住宅を設計しているのは、彼らが、住宅を建築の根源だと考えているからにはほかならない。そして、多くの先進的な建築家が住宅設計に関わることにより、日本の住宅建築では、「いかに住まうか」がラディカルに問い直されることになったのである——家族とはなにか、どれくらいミニマルな空間に人は住めるのか、自然との共生は可能か、等々。

しかし実際のところ、その「発展」を俯瞰的な視点から検証する作業は、日本国外はもとより、日本国内においてもほとんどされてこなかった。そこで本展ではアトリエ・ワンの塚本由晴(1965-)の全面的な協力を得て、系譜学の観点から、日本の戦後の住宅を分析することにした。

系譜学に基づく以上、この展覧会で紹介される基本の単位は、建築家ではなくて住宅そのものとなる。たとえば安藤忠雄の《住吉の長屋》(1976)のような傑作であっても、孤高の事例としてではなくて、なんらかの系譜の中に——この場合は、「町家」という系譜の中に——位置づける。また、「系譜」は、異なる建築家による住宅の間に認められる場合もあるが、ひとりの建築家の中で、わずか数年の間に形成される場合もある。たとえば伊東豊雄は、1976年から1984年までの間、具体的には、コンクリートで

閉鎖的に造形された《White U》から軽い屋根によっておおわれた《Silver Hut》までの間に、空間の形成方法を大きく変えた。興味深いことに、同じような展開=系譜を、同時期の篠原一男(1925-2006)と坂本一成(1943-)、それぞれの中にも見出すことができる。本展では、13の系譜によって構成されるだろう。

展示されるのは、模型(オリジナルのスタディ模型、完成模型等)、実物大模型、モックアップ、写真、図面、スケッチ、クライアントへのインタビュー映像等である。この展覧会を訪れた観客のうちに、「わたしたちはどのように住むべきか?」「わたしたちにとって家とはなんなのか」「家にとって最少の単位はなんなのか」といったラディカルな問いかけが生れることを願っている。

保坂健二郎 (東京国立近代美術館主任研究員)

1976年茨城県生まれ。2000年慶應義塾大学修士課程修了(美学美術史学)。同年より東京国立近代美術館に学芸員として勤務、現在同館主任研究員。同館で企画した主な展覧会に「建築がうまれるとき ペーター・メルクリと青木淳」(2008年)、「エモーショナル・ドローイング」(2008年)、「建築はどこにあるの? 7つのインスタレーション」(2010年)、「イケムラレイコ うつりゆくもの」(2011年)、「フランス・ベーコン展」(2013年)、「現代美術のハードコアはじつは世界の宝である展 ヤゲオ財団コレクションより」(2014年)、「高松次郎ミステリーズ」(2014年)など。また「Double Vision: Contemporary Art from Japan」(2012年、モスクワ近代美術館他)、「Logical Emotion: Contemporary Art from Japan」(2014年、ハウス・コンストラクティヴ美術館他)など国外での企画も行う。『すばる』(集英社)、『朝日新聞』、『疾駆』で連載を持ち、2013年には『新建築』の月評(隔月)を務めた。主な著作に『JUN AOKI COMPLETE WORKS 1 1991-2006』(共著、INAX出版、2006年)、『キュレーターになりたい! アートを世に出す表現者』(編著、フィルムアート社、2009年)、『福祉×美術×表現×魂』(監修、3331 Arts Chiyoda、2013年)、『アール・ブリュット アート 日本』(監修、平凡社、2013年)など。弘前大学、東京藝術大学、金沢美術工芸大学、九州大学で非常勤講師も務める。

【展示構成および出品建築家】

Japaneseness	アントニン・レーモンド《自邸》、清家清《齋藤助教授の家》、丹下健三《自邸》、生田勉《栗の木のある家》、白井晟一《呉羽の舎》
Mass production	前川國男《プレモス》、坂倉準三《四谷加納邸》、池辺陽《住宅No.3》《住宅No.76》、増沢洵《最小限住居—自邸》、大野勝彦《セキスイハイム M1》、黒川紀章《中銀カプセルタワービル》、難波和彦+界工作舎《箱の家》、《木の家（無印良品の家）》
Earthy Concrete	吉阪隆正《自邸》、吉村順三《軽井沢の山荘》、東孝光《塔の家》、阿部勤《中心のある家》
Close to Open	伊東豊雄《アルミの家》《小金井の家》《花小金井の家》《Silver Hut》 坂本一成《水無瀬の町家》《坂田山附の家》《祖師谷の町家》《House F》
A House is a work of art	篠原一男《白の家》《谷川さんの家》《上原通りの家》《高圧線下の住宅》
Play	藤井博巳《宮島邸》、毛綱毅曠《反住器》、山下和正《顔の家》、相田武文《積木の家I》、藤本壮介《House N》、柄沢祐輔《s-house》、石上純也《house and restaurant》
Sensorial	長谷川逸子《焼津の家1》、伊東豊雄《中野本町の家》、妹島和世《梅林の家》、青木淳《G》、藤本壮介《T House》、中山英之《O邸》、o+h(大西麻貴+百田有希)《二重螺旋の家》

Machiya	安藤忠雄《住吉の長屋》、坂本一成《代田の町家》、岸和郎《日本橋の家》、アトリエ・ワン《スプリットまちや》
Redefining the Gap	西沢大良《大田のハウス》、アトリエ・ワン《ミニ・ハウス》、西沢立衛《森山邸》、藤本壮介《House NA》
Lightness	広瀬鎌二《SH-1》、菊竹清訓《スカイハウス》、長谷川逸子《松山・桑原の住宅》、隈研吾+篠原聡子《伊豆の風呂小屋》、長谷川豪《経堂の住宅》、島田陽《六甲の住居》、西沢立衛《Garden & House》
Unmarketable	石山修武《開拓者の家》、宮本佳明《ゼンカイハウス》、岡啓輔《蟻鱒鳶ル》
Learning from the Vernacular	藤森照信《ニラハウス》、手塚貴晴+手塚由比《屋根の家》、五十嵐淳《光の矩形》、アトリエ・ワン《ポニー・ガーデン》、金野千恵《向陽ロジックハウス》、ドット・アーキテクト《No.00》、乾久美子《House M》
Beyond Family	清家清《私の家》、黒沢隆《星川キュービクルス》、伊東豊雄《東京遊牧少女の包》、山本理顕《岡山の住宅》、石山修武《ドラキュラの家》《世田谷村》、アトリエ・ワン《ハウス& アトリエ・ワン》、西田司+中川エリカ《ヨコハマアパートメント》、生物建築舎《天神山のアトリエ》

●本事業に関するお問い合わせ：国際交流基金 文化事業部 事業第2チーム（担当：永田、徳山、鈴木）

Tel : 03-5369-6063 / Fax : 03-5369-6038 / Email : art2@jpf.go.jp

●取材・広報用画像のお問い合わせ：大西晶子 Tel : 090-9621-5235 / Email: aquicooo@gmail.com

【広報用写真】

広報用写真をご用意しております。リリースに掲載している画像の中から、希望画像の作品名、媒体名、掲載予定時期を明記の上、広報担当までご連絡ください。
また、リリースに掲載されていない写真につきましてもお問い合わせください。

※ご使用時の注意点とお願い

- ・写真をご使用の際は画像クレジットを記載ください。
- ・トリミング、文字載せ、画像の二次使用はご遠慮下さい。
- ・使用の際は事実関係の確認の為、記事校正を PDF 形式でお送りください。
- ・掲載誌又は、掲載記事を担当者までお送りください。

①



アントニン・レーモンド 麻布の自邸・事務所(1951)
写真提供:北澤興一

②



前川國男 プレモス(1946-1951)
写真提供:前川建築設計事務所

③



池辺陽 住宅 No.76(1965) ©大橋富夫

④



坂本一成 代田の町家(1976/2014)
写真:多木浩二

⑤



伊東豊雄
中野本町の家 / White U(1976)
写真:多木浩二

⑥



石山修武 開拓者の家(1986)
©石山修武

⑦



妹島和世 梅林の家(2003)
©妹島和世建築設計事務所

⑧



手塚建築研究所(手塚貴晴+手塚由比)
屋根の家(2001)
©木田勝久/FOTOTECA

⑨



アトリエ・ワン(塚本由晴+貝島桃代)
ハウス&アトリエ・ワン(2005) ©アトリエ・ワン

⑩



ドットアーキテクト No.00(2011)
写真:太田拓実